

授業コード： ai252016

授業科目名： オブジェクト指向開発演習

履修者数： 15 名

担当教員名： 戸田 英治

回答者数： 10 名

学部：	医療福祉	0	現代社会	0	経営法／総合政策	0	工／科学技術	10
	無回答	5						
学科専攻：	理学療法	0	作業療法	0	言語聴覚	0	視覚機能	0
	看護	0	保健福祉	0	現代社会	0	経営法／総合政策	0
	知能情報	10	建築環境	0	臨床工学	0	無回答	5
学年：	1年	0	2年	0	3年	9	4年	1
							無回答	5

設問文 5.そうである 4.まあそうである 3.どちらともいえない 2.あまりそうとはいえない 1.そうとはいえない	5	4	3	2	1	科目 平均	大学 平均
A：授業への取り組みについて							
問1. 授業の欠席回数は何回でしたか 5. 欠席なし 4. 全体の1～15% 3. 全体の16～30% 2. 全体の31～49% 1. 全体の50%以上	2	7	1	0	0	4.10	4.35
問2. 授業の他に学習活動（予習・復習・課題・レポートなど）をしましたか	4	5	0	0	1	4.10	4.36
問3. 授業を受講する前にシラバスを確認しましたか	3	5	0	0	1	4.00	4.40
問4. 授業内容でわからないことを先生に質問しましたか	3	6	0	0	1	4.00	4.02
B：授業内容・方法・成果について							
問5. 授業方法について、使われた方法すべてにマークしてください（複数選択可）							
対面 10	遠隔(meet) 0	遠隔(音声ファイル) 0	遠隔(動画ファイル) 0				
遠隔(チャット) 0	遠隔(課題) 1	遠隔(テスト) 0	無回答 0				
問6. 授業は系統的に整理、準備されていますか	4	4	0	1	1	3.90	4.57
問7. 授業内容は理解しやすかったですか	3	5	0	1	1	3.80	4.44
問8. 授業は質問しやすい環境でしたか	5	3	1	0	1	4.10	4.31
問9. 授業のスピードおよび学習量は適切だったでしょうか	3	5	1	0	1	3.90	4.46
問10. シラバスまたは授業初めに掲示された到達目標は達成されましたか	2	5	1	0	1	3.78	4.46
問11. 授業内容は興味深く、知的好奇心を触発されましたか	5	3	1	0	1	4.10	4.47
C：授業の全般的印象							
問12. 教員の熱意を感じましたか	3	5	1	0	1	3.90	4.57
問13. この授業で専門的な知識や技術、または豊かな教養が身につきましたか	6	3	0	0	1	4.30	4.51
問14. 総合的に判断すると満足できる授業でしたか	3	5	0	1	1	3.80	4.51

学生へのメッセージ

貴重なフィードバックをありがとうございます。
一部、非常に厳しいご意見もいただきましたが、本演習の教育的意図を改めて説明します。

1. 評価の二極化について

今回の集計結果では、多くの項目で評価が5・4と1に二極化しています。
特に、技術の向上や知的好奇心において高い評価を得られた一方で、一部に強い不満を持つ学生がいることを認識しています。
これは、本演習が求める主体的な学びと厳格な形式遵守に適応できた学生と、そうでない学生の間で、得られた成果に大きな差が生じた結果であると分析しています。

2. レポート評価について

再認識していただきたいのは、レポートの不備は、プログラムにおけるコンパイルエラーと同じであるということです。
中身を見てくれないのではなく、評価できる状態にまで仕上げる責任は学生側にあるというプロフェッショナルの基本を求めています。
また、プログラムが正しく動作することは評価の土台となる最低条件であり、それ自体が最終目的ではありません。
オブジェクト指向開発で最も重要なのは、なぜその設計なのか、各クラスがどのような責務を担っているかを論理的に説明できることです。
コードそのものではなく、レポートを通じて設計を説明させるのは、エンジニアとして他者に構造を伝える能力を養うためです。
この意図を理解し、技術的向上の実感を報告してくれた学生がいることは、本演習の狙いが正しく伝わった証左であると考えています。

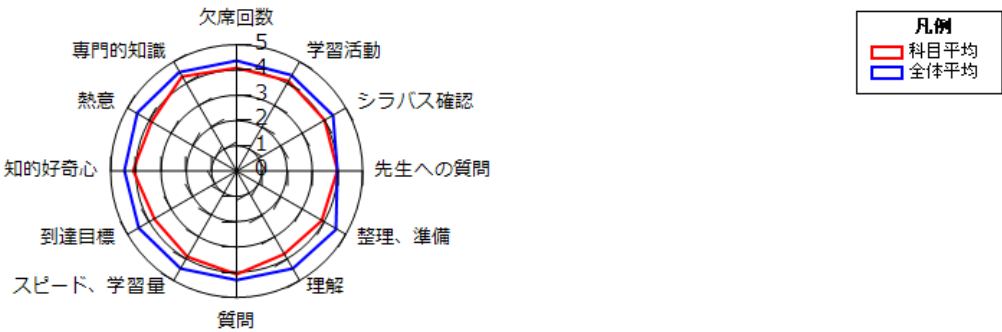
3. 質問への対応について

質問に対して煽られたと感じた学生がいたようですが、本演習では、自ら調べ、考え、それでも理解できなければ質問する姿勢を求めています。
質問時に安易に答えを提示せず、あえて前提知識を問い直したり、矛盾を指摘したりするのは、エンジニアとしての当たり前の基礎能力を身につけてほしいという意図からです。
大学生である以上、教員を答えをくれる検索エンジンではなく、議論のパートナーとして活用できるレベルまで準備して質問に来ることを期待します。

4. 総評

Javaの書き方を教わるといった受動的な姿勢では、本演習の真の価値は得られません。
厳しいルールや対話を通じて技術的な能力が向上したと実感してくれた学生がいることは心強いです。
今後も自ら考え行動できるエンジニアを育てるための指導方針を継続していきます。

レーダーチャート



総合評価

